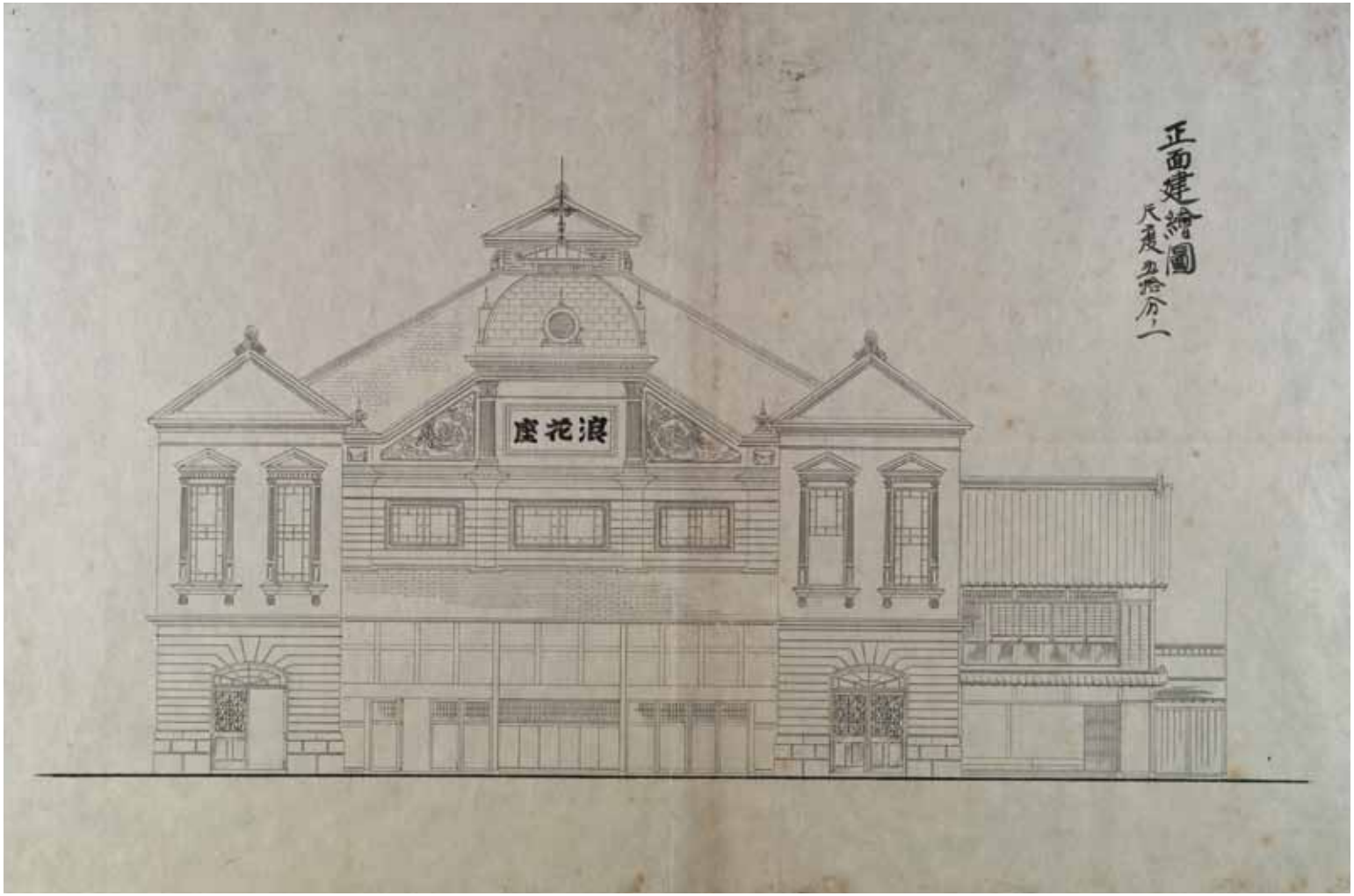
View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

大阪都市遺産と道頓堀 ： 大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料の紹介をかねて

著者	藪田 貫，藤岡 真衣
雑誌名	大阪都市遺産研究
巻	3
ページ	1-20
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/16252



「中村儀右衛門資料」浪花座正面建絵図

【論　考】

大阪都市遺産と道頓堀
―大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料の紹介をかねて―

藪　田　　貫　　藤　岡　真　衣

一　道頓堀との縁

道頓堀は、昔も今も大阪第一の名所である。戎橋の辺りで集い東へ、狭い道筋を行き交う人の波は、朝から夜遅くまで絶えることがない。堺筋に観光バスを止めて写真を撮る外国人観光客ふくめ、人出の凄さは大阪随一である。しかし、道頓堀ほど都市として変貌を遂げたところもほかにない。元和元年（1615）の道頓堀開削、その後の新地開発と芝居・茶屋の誘致以来、道頓堀といえば芝居町であった。その後、江戸・明治・大正・昭和と350年を超え、芝居小屋を中心に栄えた町であった。

しかし1980年代以降、中座・角座・朝日座などでの芝居興行が途絶え、平成11年（1999）の中座閉館を最後に、道頓堀から劇場が姿を消し、写真集や映画、人々の記憶の中にその姿をとどめるのみである。大正12年(1923)創建の松竹座は健在というが、道頓堀五座は跡形もなく、代わってカニやフグの大看板と機械仕掛けの人形が、「食い倒れ」の町道頓堀をアピールしている。これほど大きく変貌を遂げながら、なお人々を寄せ付けて止まない魅力を持つ都市は珍しい。

そんな都市道頓堀に、大阪都市遺産研究センター（平成22〔2010〕年４月設立）が関わるようになったのは、関西大学校友からのひとつの寄贈品に端を発する。センターが立ち上がった平成22年の暮れ、上田浩三氏から大阪生まれの芝居画家山田伸吉（1901～1981）の絵画２点が寄贈された。一点は「住吉大社夏祭り」、もう一点は「道頓堀今昔」である。どちらも無題であったが、前者は描かれた情景から画題はすぐに決まった。それに対し、道頓堀越に芝居町の夜の情景を描いた後者は、劇作家長谷川幸延（1904～1977）によって書き加えられた句「道頓堀の今昔問はんアスファルト」から、「道頓堀今昔」と名付けた。

この両作品だが、かつては道頓堀の寿司店「すし半松五郎」の店内に飾られていたもので、平成12年（2000)、同店の解体工事にともなって上田氏が譲り受けたものである（跡地はパチンコスロットの店となっている)。上田氏から聞いた話からはむしろ、解体工事に立ち会ったが同氏が、ゴミくずとして処分される中から救出されたとの印象をわたしは持った。なぜなら、

同氏の手で丁寧に額装され、氏の事務所に飾られていたのを目にしていたからである。十年たって、それをあらためてわたしたちのセンターに寄贈したいと提案されたのは、「個人で持っておくよりは、大学などに贈って広く役立てた方がいい」と同氏が考えられたからである。この瞬間、上記の二作品は〈文化遺産〉となった。

人から人へ渡されることで、大阪に生まれたひとつの文化が、確実に、後世に伝えられる道が用意されたからである。こうして「住吉大社夏祭り」と「道頓堀今昔」は、大阪の都市遺産として、わたしたちセンターに委託されたのである。この遺産を活用し、大阪の町づくりに生かすことが、取りも直さず、わたしたちの責務となった。

その最初の機会は、平成23年(2011) 2 月26日に開かれた第 1 回大阪都市遺産フォーラム「『大大阪』時代の社会・文化景観」であった。「道頓堀今昔」がフォーラムのポスターを飾り、「息遣いが伝わる都市遺産」と題して、センター長である藪田が紹介をした。また「住吉大社夏祭り」の方は、平成24年（2012） 7 月21日、住吉大社吉祥殿で開催された地域連携シンポジウム「住吉大社と豊臣期大坂図屏風－都市の祭礼と信仰をさぐる－」の場に、特別展示された。

こうして山田伸吉というひとりの芝居画家が、わたしたちの前に立ち現れたが、不思議なことに、ほどなく彼宛の書簡・葉書と原画・舞台書割などの資料が古書店に出て、一括してセンターに収めることとなった（平成23年度収集)。明らかに山田の遺族から出たとしか思えない個人蔵の資料で、どういう奇縁か、とわたしたちは一様に驚いたが、「住吉大社夏祭り」と「道頓堀今昔」が呼び込んだとしか思えない。早速、山田伸吉関係資料の整理に着手し、１年余をへて平成24年12月、第 4 回大阪都市遺産フォーラム特別企画展「道頓堀今昔－芝居画家 山田伸吉の世界－」で公表した。

松竹座の芝居画家として活躍した山田の出現はわたしたちに、大正から昭和50年代にかけての芝居町道頓堀の雰囲気をたっぷりと蘇らせてくれた。山田の晩年に、少しだけだが付き合いのあった肥田晧三氏から聞く回想も、かつての芝居町道頓堀の証言として往時をイメージさせるに十分な迫力をもった。いいかえれば山田の「道頓堀今昔」を手がかりに、わたしたちは芝居町道頓堀という極上の都市遺産に魅了され、研究プロジェクトとして取り組むようになっていったのである。その一連の取り組みの中に、話題となった「道頓堀五座の風景」のＣＧ復元がある。

二　CG「道頓堀五座の風景」と道頓堀商店会

近代大阪の〈失われた〉都市景観の復元という課題は、大阪都市遺産研究センターを立ち上げるにあたって、所期の目標であった。そのためにセンターの組織として、CGによる都市景観の可視化チームが置かれている。問題は、どの場所をCGによる可視化の対象とするかであった。その際、大きな参考事例となったのは、原爆の被災地広島である。

現在、平和公園となっている旧中島地区をＣＧ復元することで、失われた時代と場所・生活・記憶を蘇らせようとする取組みが、先行していたのである。平成22年（2010）11月６日、広島平和記念資料館で聞いた製作者田邊雅章氏の話は、強烈だった。冒頭、彼はこう言った（わたしの記憶による再現である）。

「平和公園となって今、誰もこの地区に住んでいない。したがって、もともと誰も住んでいなかったかのような印象を与えるが、そうではない。原爆が投下された昭和20年８月６日まで、そこには人々の濃密な暮らしがあった。市内でも有数の繁華街としての商いと生活、左右を河川に挟まれ、夏には子どもたちが川に飛び込んで遊ぶ楽しい思い出が詰まっていた。それが一瞬にして消去され、その後、ここには人が住まなくなった。」

目を開かされるとは、こういうことを言うのだろう。現に、この地を訪れる体験を何度かしているわたし自身、慰霊塔の前で祈ることはあっても、この場所に以前、住んでいた人々を思い描いたことはなかった。一度として、なかった。中島地区の人々を、忘却していたのである。これを、悟りといわずしてなんといおう。CGによる景観の復元という真の意味が、腑に落ちた瞬間である。

さらに田邊さんは、20年近くにわたって続けている旧中島地区のＣＧ復元の勘所を、わたしたちに教えた。写真を何百枚も何千枚も集めて検討しないと、建物や看板の質量感が正確に再現できないこと、写真と同じくらい当時の証言を集めることが大事であること、また当時、少年であった人々の証言は、高さにしても大きさにしても、自分の身体を本にしていてそれほど正確でないこと、などである。映画監督の新藤兼人の助手をしていた経歴が示すように映像の世界をよく知り、同時に、中島地区で被爆した田邊氏の言である。どれだけわたしたちが理解できたか、不安なしとしないが、いまも耳の奥で響いている。

要するに彼の作るCGは、都市広島の壊滅と再生の物語である。同じ壊滅と再生の物語は、昭和20年に米軍の大空襲を受けた大阪にもある。ここでも問題は、大阪の「どの場所か」である。もちろん道頓堀も空襲に遭い、芝居小屋は炎上、道頓堀地区は壊滅している。しかし、センターのCG制作が、芝居町道頓堀に向かったのには別の事情があった。道頓堀は、浜（北）側と芝居（南）側を描いた景観資料に恵まれていることであった。

CGによって景観を復元する場合、対象がひとつの建物であれば、その建物の平面図はもちろん、正面・側面の情報も、また内部の地階から最上階までのデーターが必要となるのはいうまでもない。情報は間口や高さという数値とともに、色や模様という質量感が重視される。そのどちらの情報も揃っていなければならない。一方、道頓堀という一定の範囲の地区の景観を復元するには、道頓堀川の両岸、道頓堀の通りの左右の建物が、シームレスで再現されなければならない。中座は分かるが、その左右は不明では、話しにならない。ところが道頓堀は、そ

れが分かる。堺筋から戎橋筋まで約500メートル前後の空間がシームレスで、地続きで分かるのである。

道頓堀は、その一帯が芝居町として公認されたために、『摂津名所図会』（寛政10年〔1798〕）『戯場楽屋図会』（寛政12年〔1800〕）を皮切りに、昭和初年の空中写真まで、ほぼ50年単位で全体の景観を知りうる資料が存在するのである（肥田皓三氏「道頓堀のうつりかわり」〔第４回大阪都市遺産フォーラム資料〕）。このことが確認されたのは、芝居町道頓堀のCG化を大きく進める要因となった。そのなかでも、わたしたちがとくに注目したのは、雑誌『道頓堀』（大正８年〔1919〕創刊）に掲載された道頓堀南側（芝居側）と北側（浜側）の情景であった。これを起点に、道頓堀のCG化は大きく進み、平成23年（2011）12月21日、「道頓堀五座の風景」として公開された。

最新作のCG「道頓堀五座の風景」に、いち早く反応したのが道頓堀商店会であった。年頭恒例の新年互礼会に招かれ、CGを上映することとなったのである。平成24年１月25日、互礼会の冒頭に上映されたCGは、大きな関心を呼んだ。芝居町の話は聞いていたが、だれもこんな情景の道頓堀を知らない、というのが大方の反応であった。無理もない。商店会会長の今井徹氏をはじめ、会場の参加者は40～50歳の働き盛りである。昭和５年(1930)、島の内に生まれ、道頓堀・千日前で少青年期を送った肥田先生（85歳）のような方でなければ、記憶を思い出せといっても出てくるものではない。それほど道頓堀は変化している。「うどんの今井」も、開業は昭和21年（1946）で、その前はCGにもあるとおり今井楽器店（大正５年〔1916〕創業）、さらにその前は芝居茶屋稲竹と、二転三転している。地面は同じでも、その上に建つ物は、変転に変転を重ねているのである。ほぼ90年前の情景を見せられては、驚くのも無理はない。

それでも、「なぜ道頓堀が、芝居町と言われてきたかが分かった」という声が集ったのは、大きな収穫であった。さらに、今度は道頓堀川の方から描いたCGが見たいとか、芝居小屋の中に入れませんのか、という声も、当然のことながら寄せられた。それはまた、道頓堀CGの新たな挑戦を意味していた。

山田伸吉の「道頓堀今昔」が示すように、道頓堀は北側宗右衛門の方に大きく開いており、道頓堀という河川が、芝居町への出入り口であった。船場から芝居町への通路が川と船であったことは、多くの証言がある。まさに「水の都」と芝居町は、連結していたのである。したがって長堀や西横堀などが健在であった戦前の場合、川面を船に乗って滑るようにして芝居茶屋の裏に付ける、という動線は不可欠である。問題は、それを裏付ける資料にある。

他方、芝居小屋にCGで入るにも、資料という課題は付いて回る。浪花座・中座・角座・朝日座・弁天座など、「道頓堀五座」と呼ばれた芝居小屋はいずれも、小屋の正面に櫓を掲げ、内部には枡で切った観客席、花道と廻り舞台の装置など、独特の構造をもつが、その内部空間の検証は、関連資料の入手困難という問題のため、これまでほとんど行なわれていない。わずかに立命館大学アートリサーチセンターが行なった旧金毘羅大芝居（道頓堀の「大西の芝居」

をモデルにして天保６年〔1835〕に建築された現存の芝居小屋、重要文化財）のCGがあり、劇場の入り口から内部に入り、枡席と舞台ばかりか、奈落や廻り舞台もCGで見ることができる。しかし、旧金毘羅大芝居は現存しており、なにもCGで見なくても、現地に行けばいくらでも実見することができる。CGでするなら、現存しない、失われたものこそ、意味がある。そう考えると、道頓堀五座は、まさに適任である。どこかに資料はないものか・・・

不思議なもので、「念ずれば通じる」の諺どおり、それがあったのである。というより、出てきた瞬間をわたしたちが掴まえたのである。しかも、CG「道頓堀五座の風景」を公開した平成23年12月に。出てきたばかりの大魚を捕まえてくれたのは、センターの事務スタッフであったが、それは、「都市遺産としての道頓堀」という課題が、ひとりふたりの研究員の個別のテーマでなく、センター挙げてのテーマになってきたことを意味していた。

「大阪の劇場大工　中村儀右衛門・宗三資料」は、歳が改まった平成24年正月になってセンターに収められた。当初見ていた目録以外にも資料があることが分かり、収集は二度、三度と続いたが、大学当局のバックアップもあって、無事、すべての資料を入手することができた。その詳細は、後述されるが、資金は購入のためだけではなかった。図面類の補修のためにも必要であった。支援を惜しまれなかった大学当局に、この場を借りて御礼申し上げたい。

道頓堀のCGによる景観復元は、建物としての劇場にとどまらず、歌舞伎・新派・新国劇・文楽などの演劇、役者や観客が集った茶屋・飲食店街、水陸両面からのアクセス、コーヒーショップや写真店などの進出、人々の暮らしと息遣いが聞こえる復元でなければならない。そのため歴史、建築、文化遺産、都市祭礼、歌舞伎、CG技術などの専門家が知恵を出し合うことが求められ、さらに道頓堀商店会との連携が不可欠である。その点で、CGが機縁となった道頓堀商店会との交流は願ってもないことであった。そこに「大阪の劇場大工　中村儀右衛門・宗三資料」が出てきたのであるから、CG第二弾として芝居小屋の復元に、商店会と協力して取り組めるのではないか、との夢が広がった。

しかし、道頓堀の都市再生という課題の大きさを考えたとき、連携はセンターと商店会ではなく、関西大学全体との間で進められるほうが効果は大きいと判断し、学長コーナーに打診することで、道頓堀商店会と関西大学との連携協定への取り組みは始まった。それが昨年10月であったことを思えば、平成25年１月16日の協定書調印までの道筋は、いたってスムーズなものだった。その席上、新発見の「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」(註) の概要を発表するとともに、１月29日に開催される道頓堀連続フォーラムの第１回目（サントリー文化財団支援事業）で、道頓堀をはじめミナミの商店会の人々を招いて詳細を紹介すると通知した。なぜなら「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」は、わたしたちセンターの学術資料であるばかりか、道頓堀の歴史を語り、明日を考える貴重な資料でもあるからである。

（註）古書店の目録では、「大阪の劇場大工 中村儀右衛門・宗三資料」とあったが、センターでは、「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」と呼ぶ。大工職は相続されており、儀右衛門がそうで

あったように、宗三もやがて、儀右衛門を相続する立場にあったからである。

思うに都市遺産には、三つの要素がある。第一に建物、第二に人、第三に資料。道頓堀でいえば中座・角座といった芝居小屋が〈建物〉に当たる。すでにこの世に現存しない。ところが中座で芝居を観た人や演じた人は、まだ生きている。生きている〈人〉には、証言を生み出す力がある。死んでいても、息子や妻に語られている場合もある。意識しない遺言として。

昨年の新年互礼会以降、しばしば話したり、同席したりする機会があるが、道頓堀商店会会長今井徹氏はつねに、「道頓堀にはDNAがある」という。芝居町としてのDNAである。氏にはわずかに中座の記憶しかないが、楽器店を始めた祖父から聞いた芝居町の話を覚えているのである。今井さんはそれを、道頓堀のDNAという。それは、わたしたちのいう都市遺産でもある。今井さんはさらに、「道頓堀を浄化しなければならない」と口癖のように言う。道頓堀の環境の悪化がひどいと、口をすっぱくして言われるのである。いつも賑わっていていいではないか、という皮相な見方をしていない。現に、毎週土曜には、朝の６時からゴミ掃除が「道頓堀の掃除を楽しむ会」の人たちによって続けられている。したがって芝居町道頓堀の再生はまた、美しい町を取り戻す闘いでもある。

この時、芝居町のDNAがモノを言うが、芝居町を取り戻すには、〈人〉と並んで第三の要素〈資料〉が必要である。日記や写真、ビデオで故人が蘇るように、劇場の資料によって芝居町が再現される可能性が広がる。「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」は、まさにそのような資料である。「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」に依拠したわたしたちのCG化の取り組みも、道頓堀の環境浄化の一環であることを肝に銘じたいと思う。

三 「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」について

大阪都市遺産研究センターが所蔵する「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」（以下、中村儀右衛門資料と略す）は、総点数455点におよぶ〔図１　中村儀右衛門資料〕。

これらは、明治時代以降の大阪における劇場建設の様相を知ることができる貴重な資料である。資料の内容を大きく分類すると、①中村儀右衛門の履歴書、②彼が記した日記・覚書、③道頓堀をはじめとする劇場などの図面、④劇場の構造などを記した書類（建築仕様書・摘要書・明細書など）、⑤大道具帳、⑥勘定帳、⑦出勤簿である。もちろん、資料の中心をなすのは劇場関係資料である〔表１　中村儀右衛門資料 劇場別資料リスト、末尾に掲載〕。

中村儀右衛門の履歴書は、５冊ある。これらの履歴書は、明治時代から大正時代にかけての中村儀右衛門の足跡を知る基本的な資料といえる。これらは、罫線の入った用紙に書かれたもので、その内容には、加筆・修正が加えられている。工事の請負に当たって、作成され、増補されたものと思われる。また中村儀右衛門が記した日記と覚書は、合計15冊である。とくに日記は、明治37年・39年・40年・41年、大正２年のものがあり、墨や鉛筆で書かれている。その

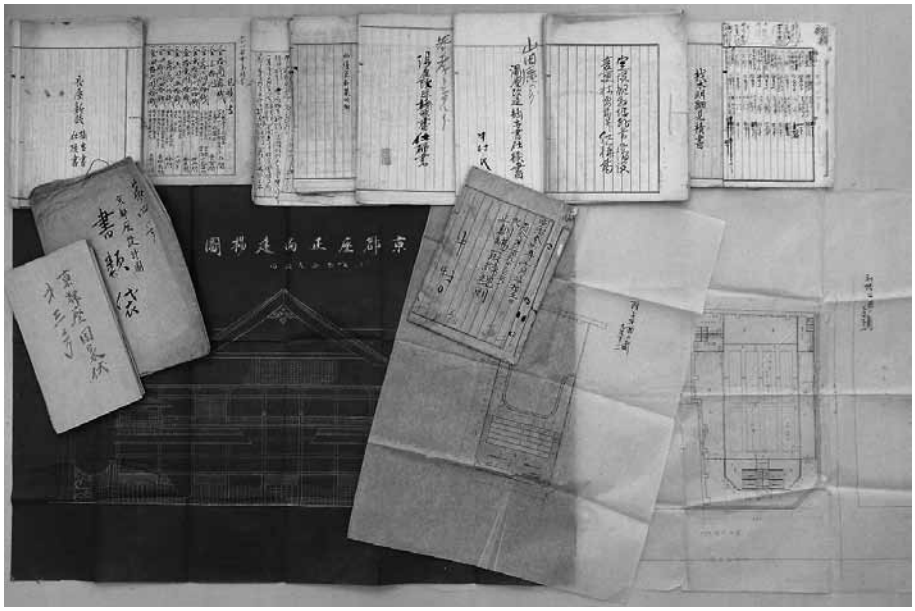


図１　中村儀右衛門資料

内容については今後、調査が必要だが、「角」「弁天」といった道頓堀の劇場名が記されている。

ここで、明治時代の道頓堀の劇場を確認しておきたい。当時、道頓堀川の南側には、西から「浪花座」「中座」「角座」「朝日座」「弁天座」の五つの劇場が軒を連ね、道頓堀五座ともよばれた〔図２　明治時代の道頓堀〕。

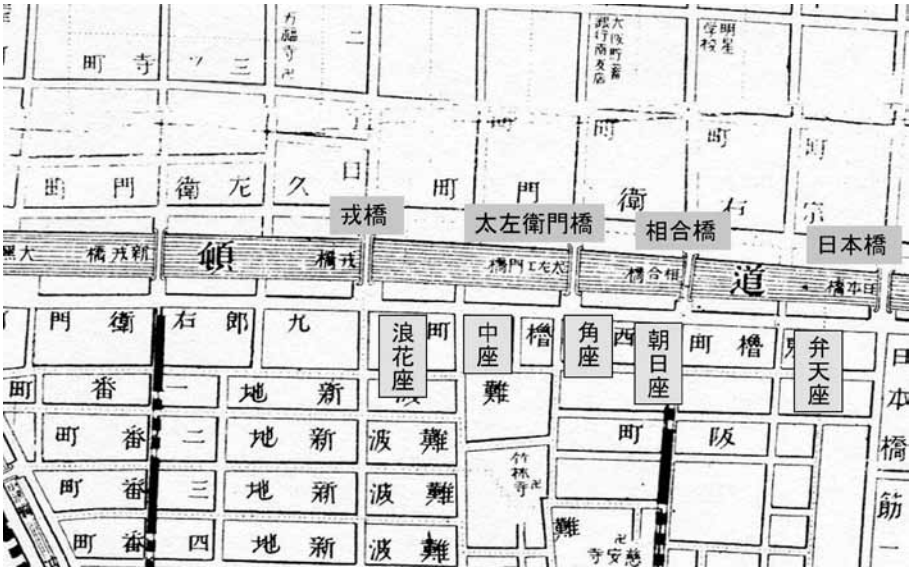


図２　明治時代の道頓堀（明治38年〔1905〕）（地図資料編纂会編『日本近代都市変遷地図集成〔大阪・京都・神戸・奈良〕』柏書房、1987年をもとに作成）

中村儀右衛門資料のうち、図面は221点ある。なかでも道頓堀のものについては、浪花座・角座・弁天座の図面が、調査で確認できている。図面は和紙、青写真、硫酸紙などに描かれている。劇場の正面や側面などの外観を描いた図面をはじめとして、劇場の断面図、客席・舞台など劇場内部を描いた図面などがある。また、千日前など大阪の各地の劇場の図面もあり、劇場以外に、湯屋や長屋などの図面も確認できる。

さらに、劇場の構造などを詳細に記した建築仕様書などもみられる。これらの書類から、劇場の建坪数、劇場の内部外部の構造、工事に必要な材料や工事方法などを知ることができる。道頓堀に関するものは、浪花座・角座・弁天座・中座の書類である。具体的には、浪花座については明治43年（1910）、新築時の摘要書・仕様書、そして大正６年（1917）の摘要書、角座は大正時代の摘要書・仕様書、さらに弁天座は明治時代の仕様書・明細書、中座は舞台・楽屋・湯殿・勘定場の摘要書・仕様書などがみられる。

大道具帳は、明治時代から大正時代にかけてのものを中心として、132点ある〔表２　中村儀右衛門資料のうち大道具帳一覧、末尾に掲載〕。これらは、舞台に飾り付けられる大道具を、上演する順に描いた帳面である。表紙には、興行の月と、上演する演目が記され、表紙をめくると、舞台装置などが墨で描かれている。墨書きのほかに、彩色をほどこした大道具帳もふくまれている。現時点の調査では、道頓堀五座に関係するものとして、浪花座、弁天座の大道具帳が多いほか、中座・角座のものも確認できる〔図３　大道具帳〕。

また、劇場の興行や大道具などにかかった費用を記した勘定帳もあり、道頓堀のものは、大

図３　大道具帳

正６年の浪花座での興行に関する勘定帳である。そのほかの劇場としては、楽天地、ルナパーク、北陽演舞場などの勘定帳がみられる。

出勤簿は、大工などの出入りを確認した帳簿で、明治43年の出勤簿と、大正９年（1920）の人夫出勤帳の２冊である。勘定帳や出勤簿をはじめ、そのほかの書類については、今後調査を進めていく予定である。

つぎに、劇場大工中村儀右衛門について、彼の履歴書をもとに、出生から大正２年（1913）までの足跡を辿ってみたい〔表３　中村儀右衛門履歴〕。

表３　中村儀右衛門履歴

年月日	年齢	主な経歴
嘉永５年（1852）12月８日	1	中村儀右衛門の長男として、大阪市西区北堀江上通二丁目に生まれる。幼名奈良松。
文久３年	12	父儀右衛門に従い、大工職の修業をし、製図法を実修する。
明治５年（1872）２月	21	父が死去し、跡目相続の上、儀右衛門と改名する。
明治５年10月～同６年６月		山城国木津郡大工棟梁の椿井平四郎に従い、製図と大工を実習し、同所に大里小学校を建築する。
明治６年７月～	22	大阪市東区淡路町二十三区小学校の建築を下請し、成工する。
明治８年～同10年	24	岡山県士族大工髙山照朝を師として学ぶ。
明治10年11月～同12年６月	26	熊本県立病院新設につき、下請し、建築する。
明治12年６月～同13年４月	28	鹿児島市元種ヶ島屋敷跡に同県士族中村義行の邸を設計し、建築する。
明治12又は13年		鹿児島私学校主事中原満兵衛の嘱託により、西郷隆盛神廟内の神前を造営し、私学校その他知名の士より賞状を受ける。
明治18年８月～同19年９月（又は３月）	34	東京の皇居造営につき、福岡県士族廣津三助の名義で第一区第三十三号女官面謁所御内儀係りを、宮内省技師尾崎新吉の監督のもとで、建築する。
明治19年４月～同20年１月	35	横須賀鎮守府建築部東京支部の命により、海軍省水路部観象台と目黒火薬庫第三部を建築する。
明治19年８月～同20年１月		東京芝区高輪士族三宮信胤の邸を、工学士松崎満長の監督のもとで設計し、建築する。
明治19年９月～同20年４月		栃木県塩原にて、伊東祐麿の別荘を設計し、建築する。
明治20年３月～同21年３月	36	明治工業会社技師瀧大吉の指名を受け、その監督のもとに、東京芝区新橋外丸木写真館を設計し、建築する。
明治22年２月～同23年11月	38	東京芝高輪海軍大将伊東祐亨の邸を設計し、建築する。
明治23年９月～同24年４月	39	東京府の劇場取締規則改正につき、嘱託を受け、向柳原に柳盛座を建築する。
明治25年～同26年	41	新町廓事務所と婦徳会場の新築につき、同廓のドクタクにより建築する。
明治26年１月	42	千日前の横井勘市の依嘱を受けて、横井座を設計し、建築する。
明治27年５月	43	道頓堀・弁天座の座主尼野吉郎兵衛の依嘱により、弁天座を設計し、新築する。
明治28年３月	44	道頓堀・浪花座の座主秋山儀四郎の嘱託により、浪花座の大修繕の設計と工事を成工する。
明治29年５月	45	天満天神社北裏門にある天満座の新築につき、設計と工事を嘱託される。
明治29年11月		大阪演劇株式会社の新劇場を梅田停車場前に建設するため、設計と建築工事を請負い、竣工する。
明治31年５月	47	道頓堀・角座の座主秋山儀四郎の嘱託により、角座の大修繕の設計と工事を成工する。
明治34年３月	50	松島八千代座の座主吉田卯之助の嘱託により、八千代座新築につき、設計と工事を請負い、成工する。
明治41年８月	57	小劇場常盤座の設計と監督をする。
明治41年８月		小劇場玉造座の座主入江伊助の嘱託により、設計と工事建築をする。
明治43年	59	道頓堀・浪花座新築につき、座主髙木徳兵衛の嘱託により、設計と工事を請負い、成工する。
明治43年		老松町・老松座の座主伊藤利作の嘱託により、設計と建築工事を請負い、成工する。
明治43年11月～同44年４月		千日前大矢藤松のドクタクにより、劇場電気館を設計し、建築する。
明治44年６月～	60	千日前帝国館活運写真を設計し、建築する。
明治44年11月～同45年６月		髙木徳兵衛のドクタクにより、京都の新京極・京都座の設計と監督をし、成工する。
明治45年９月～大正元年（1912）11月	61	千日前山田幸左衛門のドクタクにより、劇場常盤座を設計し、建築する。 東京市浅草区橋場在古水幸七氏のドクタクにより、東区平野町四丁目御霊神社前の活運写真場五二館を設計し、建築する。
大正２年３月～	62	堀江遊廓演舞場新築につき、設計と監督をする。

彼は、嘉永５年（1852）12月８日、父中村儀右衛門の長男として、大坂の堀江に生まれた。幼名は、奈良松といった。12歳のときに、父のもとで大工の修業を始め、製図法を学び、21歳のときに、父の跡目を相続して、儀右衛門と名前を改めた。その後も、大工の修行を積み、明治５年（1872）から明治13年（1880）にかけては京都・大阪・熊本・鹿児島などで活動し、さらに、明治18年（1885）から明治24年（1891）にかけては、東京を中心として、数多くの建物をてがけた。

そして、儀右衛門が劇場大工としてデビューしたのが、明治23年（1890）から同24年にかけての東京の柳盛座の建設であった。これを契機として、道頓堀やそのほかの大阪の劇場の設計・建設・修繕の仕事をてがけるようになっていったのである。明治25年（1892）から大正２年にかけての履歴を辿ると、道頓堀では明治27年（1894）の弁天座の新築、明治28年の浪花座の修繕、明治31年（1898）の角座の修繕、明治43年（1910）の浪花座の新築にたずさわっていたことが確認できる。さらに履歴書と押印から、当時の中村儀右衛門の住所は「大阪市南区九郎右衛門町二五一番」であったことがわかる。つまり芝居町道頓堀の真っ只中に住みながら、劇場の建築請負業の仕事を営んでいたのである。

道頓堀以外にも千日前・梅田・天満・松島・堀江・玉造など、大阪の数多くの劇場の建設に関わった。これらの劇場を地図で確認すると、南は、道頓堀の浪花座・角座・弁天座、千日前の横井座・常盤座・電気館、北は梅田の大阪歌舞伎、天満の老松座・天満座、西は松島八千代座・堀江演舞場、東は玉造座などである〔図４　中村儀右衛門が建設に関わった主な劇場〕。

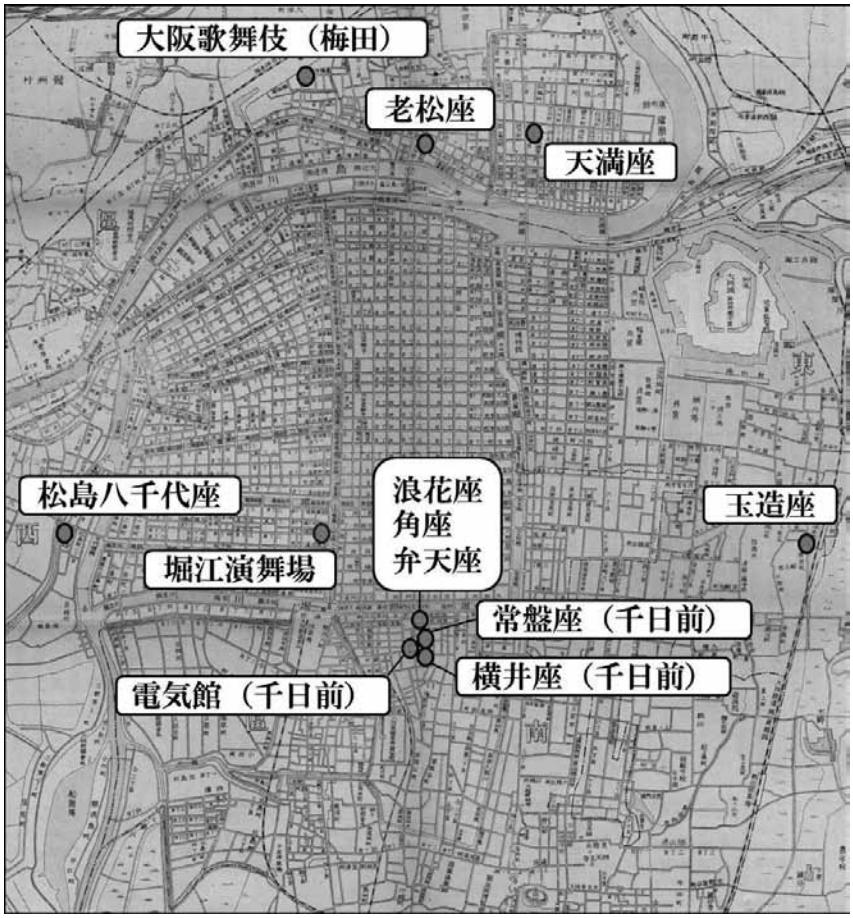


図４　中村儀右衛門が建設に関わった主な劇場（『大阪市新図　縮尺弐万分之壱旧新町名掲載　官衙著名諸店舗所在地表』、明治33年〔1900〕をもとに作成）

なかでも注目されるのは、明治31年から32年の１年間しか存在しなかった幻の「大阪歌舞伎」であるが、これについては別途、報告する（藤岡「梅田の『大阪歌舞伎』－明治31年に開場した新築劇場－」本誌21p-37p）。

一方、中村儀右衛門は、舞台の大道具の仕事も請け負っていたことが、履歴書の文面、図面や帳簿などから明らかとなった。とくに、図面や帳簿などに押された印鑑に注目すると、「建築請負業・大道具師　中村儀右衛門」とある。また、大道具帳にも、「棟梁　中村」という文字がみられることから、今後は、大道具帳の調査も進めていくことが必要である。

これまで中村儀右衛門は、劇場史や建築史、大阪の歴史などでも、ほとんど知られていない人物と言っていい。したがって彼の資料は、大きな空白を埋める可能性に満ちている。

最後に中村儀右衛門資料以外の彼に関わる記事を付記しておきたい。

・明治16年（1883）10月の刊記をもつ著書『明治中学規矩要訣』があり、住所は「大阪府下西区北堀江下通二丁目二十六番地」（和住香織氏のご教示）。
・昭和11年（1936）刊行の『近代建築画譜』に収める角座は、大正９年10月に竣工されたものであるが、設計は岡部建築事務所、施工中村儀右衛門とある（橋寺知子先生のご教示）。
・昭和10年の大阪市内電話帳によると、「中村楼、中村儀右衛門、南　大和町二四、旅館・大道具・建築」とある（肥田晧三先生のご教示）。

（執筆分担：第１項と第２項は藪田、第３項は藤岡）

（藪田　貫　センター長／関西大学文学部教授・関西大学博物館長）
（藤岡　真衣　関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程）

表１　中村儀右衛門資料　劇場別資料リスト

劇場名など	劇場などの種類	資料の分類	資料名
角座	大劇場	仕様書・摘要書等	・角座変更摘要書幷仕様書　大正七年六月五日願 ・大劇場角座修繕（変更）御願書 ・角座表正面在来之客席椅子席ニ変更及ビ外部正面櫓修繕仕様書 ・第二回目届　摘要書仕様書 ・第一回目届　摘要書幷仕様書　※５冊を合冊
			角座変更摘要書幷仕様書　大正八年五月十八日調　大中村　※図面あり
			・二階正西面桟敷建出ノ時ノ扣　角座変更摘要書幷仕様書　大正八年五月十八日願分　大中村 ・定設觀物場変更修繕摘要書仕様書　中村 ・定設觀物場非常口及ビ本家建物修繕摘要仕様書 ・劇場附属觀客用厠及各渡廊下新築仕様書　※４冊を合冊
			・大劇場付属建物増築願（角座　大正九年一月七日） ・大劇場増設及一部改造願（角座　大正九年四月日） ・角座（甲）客席其他改修及増築明細及見積書　※３冊を合冊
			大正九年參月第壹号扣　大劇場角座増築工事　摘要書仕様書及明細書　中村儀右衛門
			・角座変更摘要書幷仕様書 ・角座増築便器其他水道見積書 ・角座増築鐵物及亜鉛（鉛ヵ）引鉄板見積書 ・角座（甲）客席其他改修明細及見積書 ・（丁）廣間天井改造明細見積書 ・角座増築雑工見積書 ・角座増築建具及金物見積書 ・角座増築假設工見積書　※８冊を合冊
			角座摘要書幷仕様書　※青写真の図面８枚あり
			角座劇場新築仕様書
		図面	大劇場角座　階下平面圖　尺度百分之一
			大劇場角座一階平面圖　縮尺壱百分一
			大劇場角座平面圖　縮尺壱百分一
			大劇場角座三階平面圖　縮尺壱百分一
			大劇場角座付属建物増設變更圖　縮尺五十分一　二十分一
			大劇場角座地階平面圖　縮尺壱百分一
			大劇場角座三階平面図　尺度百分ノ一
			大劇場角座階上平面圖　尺度百分之一
			大劇場角座三階平面図　尺度百分ノ一
			大劇場角座三階平面図　尺度百分ノ一
			大劇場階上平面図　尺度百分ノ一
			大劇場階下平面図　尺度百分ノ一
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其壱　各階コンクリート平面圖　縮尺五十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其貳　基礎杭及鉄筋配置圖　縮尺五十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其參　各柱鉄筋詳細圖　縮尺貳十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其四　各階床及塔屋根伏圖　縮尺五十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其五　各階床筋配置圖　縮尺五十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其六　各階梁及胴指鉄筋詳細図　縮尺弐十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其七　各階梁及胴指並ニ床鉄筋詳細図　縮尺弐十分之壱
			大劇場角座鉄筋「コンクリート」構造圖　其八　各階入口及窓配置圖　縮尺五十分之壱
			大劇場角座増築圖　第三號　断面　縮尺五十分一
			大劇場角座増築圖　第四號　床伏　附塔屋平面/廊下小屋伏　縮尺五十分一
			「階下平面圖　尺度二百分ノ一」「二階平面圖　尺度二百分ノ一」「三階平面圖　尺度二百分ノ一」　※裏面に〔正面図〕あり
			在来三階平面圖　縮尺百分之一
			在来之分初階平面図　尺度百分之一
			在来之分　階上平面圖　尺度百分ノ一
			変更初階平面圖　縮尺百分之一
			変更初階平面圖　縮尺百分之一
			変更階上平面圖　縮尺百分之一
			変更階上平面圖　縮尺百分之一
			変更初階平面圖　縮尺百分之一
			変更初階平面圖　縮尺百分之一
			変更階上平面圖　縮尺百分之一
			変更階上平面圖　縮尺百分之一
			変更初階平面圖　縮尺百分之一
			正面建繪圖（尺度五十分之一）
			〔初階平面図〕
			三階平面圖　尺度二百分ノ一、階上平面圖　尺度二百分ノ一、初階平面圖　尺度二百分ノ一

			初階平面圖　縮尺百分之一
			側面規計之圖（縮尺五十分之一）
			三階平面圖　縮尺百分之一
			断面規計之圖　尺度五十分ノ一
			表側断規計之圖　尺度五十分ノ一
			表側断規計之圖　尺度五十分ノ一
浪花座	大劇場	仕様書・摘要書等	四拾参年壱月十四日手斧初　大劇場浪花座建築　摘要書及ビ仕様書　大工中村
			・大劇場浪花座摘要書　大正六年六月十七日坪数調ベタ時点也 ・食堂ノ分下書キ　大劇場浪花座修繕御願書・摘要書・仕様書 ・大劇場浪花座修繕御願書・便所及通路上階段囲イ其他の■願分　摘要書及仕様書 ・食堂新設ノ時願分　大劇場浪花座修繕　摘要書及仕様書（印）　※４冊を合冊
			浪花座監　定設觀物場新築仕様書
		材木書	四十参年六月廿七日（印）　大劇場浪花座材木書　中村宗三
		見積契約書	浪花座見積契約書
		木積扣	浪花座カ■とのカ■（リヵ）小屋　木積扣　中村
		勘定帳	大正六年五月興行紀念劇ヨリ　大劇場浪花座「第参號」勘定帳
		図面	大劇場浪花座■（乙八枚ノ口）未定但シ正面■家■■切妻ノ西洋館のと揃有リ
			〔表側正面規計〕
			〔平面図〕
			〔階下平面図・階上平面図〕
			〔断面図〕
			〔断面図〕
			〔平面図〕
			正面建繪圖　尺度五拾分ノ一
			断面建繪圖　尺度五拾分ノ一
			表側正面規計　尺度五拾分ノ一
			断面規計　尺度五拾分ノ一
			舞臺正面規計　尺度五拾分ノ一
			側面規計　尺度五拾分ノ壱、正面規計　尺度五拾分ノ一、 断面規計　尺度五拾分ノ一
			断面規計　尺度五拾分ノ一
			正面建繪圖　尺度五拾分ノ一
			横面規計　尺度五拾分一
			表正面断面規計之圖　尺度五十分ノ一
			側面建繪圖　尺度五十分ノ一
			正面建繪圖　尺度五十分ノ一
			床カ伏之圖　尺度百分ノ一
			地形伏之圖　尺度百分ノ一
			階上刻伏之圖　尺度百分ノ一
			階上平面之圖　尺度百分ノ壱
			甲部平面之圖　尺度百分ノ一、乙部平面之圖　尺度百分ノ、甲部横面規計　尺度五拾分ノ一
			初階平面圖　尺度百分ノ壱
			小屋刻伏之圖　尺度百分ノ一
			大劇場浪花座　階上平面圖　尺度弐百分ノ一、仝三階平面圖　仝
			大劇場浪花座　階下平面圖　尺度弐百分ノ一
			階段親柱手摺子笠木側板 縮尺五分ノ壹、階段　縮尺■拾分之一、階段室及便所仕切矩計　縮尺五分ノ一
			〔側面図〕
			〔側面図〕
弁天座	大劇場	明細書等	第壱号　明細書　辨天座
			辨天座劇場　明細書　第貳号
			・辨天座劇場　明細書　第参号 ・辨天座表屋根修繕扣　仕様書　四十二年五月吉日　宗三計　※２冊を合冊
		図面	小屋伏　尺度百分之一
			小屋伏　尺度百分之一
			地形伏　尺度百分ノ一
			固家刻伏　尺度百分ノ一
			三階刻伏　尺度百分ノ一
			貳階刻伏　尺度百分ノ一
			階上平面之圖　尺度百分ノ一
			階下平面之圖　尺度百分ノ一
			三階平面之圖　尺度百分ノ一
中座	大劇場	仕様書・摘要書	中座舞台廻り及楽屋湯殿表勘定場修繕変更摘要書及仕様書
天満座	大劇場	仕様書・摘要書	天満座改築仕様書
			天満座改築摘要書
八千代座	大劇場	図面	大劇場松嶋八千代座平面圖入り但シ現今■■ハ豫定の■ナリ
			正面規計　尺度五拾分之一
			断面建繪圖　尺度五拾分之一

			断面規計　尺度五拾分之一
			在来階下平面之圖　尺度百分之壱
			階下平面圖　尺度百分之一
			〔側面断面図〕
神戸大黒座	大劇場	図面	大正六年六月神戸大黒座修繕願圖面扣　大劇場階上平面圖　尺度百分ノ一
			大劇場階下平面圖　尺度百分一
			〔神戸大黒座　平図面〕
			〔舞台平面図〕
横井座を含む	大劇場	図面	〔千日前横井座　側面図〕
			正面建繪圖　尺度五拾分一
			〔正面建絵図〕尺度五拾■■（分之）壱
			〔正面建絵図〕※建物上部に塔あり
			正面圖　五拾分一
			横面圖　五十分ノ一
電気館	小劇場	仕様書・摘要書	電氣館　新築小劇場摘要書仕様書
		図面	電気館
第一電気館	小劇場	仕様書・摘要書	四十三年十一月　宗三計　大矢様　第一電氣館　小劇場摘要書并仕様書
大正座	小劇場	仕様書・摘要書	南警【　】七三九号 大正元年八月下旬設計 大正座 新築小劇場摘要書仕様書 大工中村（印）
		図面	大正座
千日前常盤座	小劇場	仕様書・摘要書	千日前　常盤座摘要書　但シ仕様書之日賀恵　明治四拾壱年九月七日調　大工　中村氏所有
			・四十一年分　劇場新築見積書 ・明治四十四年八月十一日　常■舘山田■　変更摘要書仕様書　中村 ・〔仕様書〕　※３冊を合冊
			明治四十五年五月廿一日調　保五七三五号御許可之分　常盤座小劇場再築摘要書仕様書　七月八日訂正之分　中村氏（印）
			千日前常盤座見積書　同山田ノ口
			・大正元年九月廿六日　常盤座変更ニ付スル　摘要書及ビ仕様書 ・常盤座（変更）摘要書仕様書　朱線ニ直シアルハ第二回目訂正也 ・四十五年五月弐十一日調整ス　千日前常盤座分　小劇場再築摘要書仕様書　中村氏 ・観物場一部変更御願・（変更）摘要書・変更仕様書　※４冊を合冊
玉入座	小劇場	摘要書	明治四十二年拾月四日　宗三計　玉入座　小劇場変更摘要書　大工中村氏
入江座	小劇場	仕様書・摘要書	入江座　摘要書・仕様書
相生座	小劇場	仕様書・摘要書	明治四十二年拾二月六日調之■（片ヵ）町相生座之分　宗三計　新築相生座　小劇場変更摘要書及仕様書　大工中村氏
		図面	變更階上平面圖　尺度百分之一
			變更初階平面之圖　尺度百分之一
			■（貳）階刻伏　尺度百分ノ一
			固家刻伏　尺度百分ノ一
玉造館	小劇場	仕様書・摘要書	明治四十二年拾月廿二日調　宗三計　千日前大矢様之分　玉造館　小劇場但活動寫真場　新築摘要仕様書控　大工中村氏
			玉造　小劇場新築　仕様書扣
			明治四十三年八月　玉造舘　寄席新築摘要仕様書　宗三計
老松座	劇場	材木積書	老松座材木積り書
梅田歌舞伎座	劇場	仕様書・摘要書	梅田歌舞伎座　劇場新築仕様書
			梅田歌舞伎座　劇場附属仕様書
			梅田歌舞伎座　劇場附属俳優部屋新築仕様書
			梅田歌舞伎座　劇場附属便所新築仕様書
			梅田歌舞伎座　劇場新築明細書 大中村
			梅田歌舞伎座　劇場附属俳優部家明細書
		図面	大阪演劇株式會社經営大阪歌舞伎新築一件圖面入揃有リ
			廻り伏圖　尺度四十分之一
			横面規計　尺度五十分之一、正面規計　尺度五十分之一
			二階伏　尺度五十分一、小屋伏　尺度五十分一
			階下平面之圖　尺度五十分之一、階上平面之圖　尺度五十分之一
			横面建繪圖　尺度五十分之一、正面建繪圖　尺度五十分之一
			奈落石桟規計　尺度五拾分之一
			奈落石桟下地形伏圖　尺度五拾分之一
			二階伏之圖　尺度百分一
			二階平面之圖　尺度百分之一
			階下平面之圖　尺度百分之一
			階上平面之圖　尺度百分之壱、三階平面之圖　尺度百分之壱
			地形伏之圖　尺度百分一
			三階平面之圖　尺度百分之一
			〔平面図〕
			〔廻り舞台平面図〕
			小屋伏、平面之圖、横面之圖、断面之圖
			小屋伏之圖

京都座	劇場	図面	来ル四月廿五日京都行申合
			京都座小屋伏圖　縮尺百分之一
			京都座矩計圖　貳拾分壱縮図
			京都座表建家中仕切　弐拾分壱ノ図
			京都座舞臺及場仕切合掌　貳拾分ノ壱縮図
			京都座建揚断面圖　五拾分壱縮図
			京都座正面建揚圖　五拾分壱縮図
ルナパーク	劇場	大道具常式附帳	千日土地建物株式會社ルナパーク本舘　大道具常式附帳　大中村
		總勘定帳	大正参年貳月超　ルナパーク第貳號　大阪土地建物株式會社　總勘定帳
		図面	ルナーパーク　大正四年
北陽演舞場	劇場	勘定帳	北陽演舞場勘定簿　大道具師　大中村
楽天地	劇場	勘定帳	千日土地建物株式會社　樂天地 第参號（總勘定帳）
			千日土地建物株式株式會社　樂天地勘定帳（第五號簿）　大道具　大中村
永楽館	劇場	図面	永楽館　廻り舞台
常盤座	寄席	図面	常盤座　寄席再築図
八千代座近辺の平家建寄席	寄席	その他	四十一年拾月廿九日　常設舘　八千代座近邊ノ平家建寄席日賀恵　他人ニ借用無用　大工中村所有　宗三設計
朝日館	寄席	仕様書・摘要書	四十一年拾壱月設計　天王寺朝日山殿ノ扣　新築寄席仕様書　大工中村氏
			明治四十二年二月廿三日夜　天王寺朝日舘　小劇場変更増築摘要書
		明細書	朝日舘　寄席　材木明細書　大中村
		図面	天王寺大道朝日山四郎右エ門氏ノ經営ノ寄席朝日館新築図面一件
千日前劇場	寄席	仕様書・摘要書	・仕様書　千日前劇場　寄席新築 ・変更仕様書 ・四十四年十月二十八日　千日前逢坂■様ノ分扣　表構変更　観物場摘要書仕様書　大工中村 ※３冊を合冊
			・千日前高木殿扣　寄席摘要書及仕様書　明治四十二年三月 ・四十二年八月　摘要書保安課寫シ　中村宗三　他人借用無用　※２冊を合冊
子宝席	寄席	仕様書・摘要書等	・大正元年拾月六日見積ル　中村　千日前　子宝席明細見積り書　逢坂様 ・子宝席　寄席再築願・摘要書・仕様書　※２冊を合冊
千日浪花館	観物場	仕様書・摘要書	千日浪花舘■■　定設観物場表講変更　摘要書仕様書
八千代倶楽部	観物場	仕様書・摘要書	大正元年九月廿日　八千代倶楽部再築摘要書
			大正元年十月十五日　八千代倶楽部　定設観物場変更修繕摘要書仕様書
日の出館	観物場	仕様書・摘要書等	・第一一七〇五号　明治四十五年七月廿七日進達　第二七八六号南警■■者　ナンバ　日の出舘　観物場摘要書仕様書　中村氏 ・大正元年九月五日　千日前日の出舘再築　材木明細見積書　九良右エ門町弐五一　中村宗三（印）　※２冊を合冊
		図面	日の出館
四ツ橋倶楽部	観物場	仕様書・摘要書	・四ツ橋倶楽部　第二変更ニ体スル摘要書及仕様書　四五年五月六日　中村 ・四十五年参月二十五日　四ツ橋倶楽部分　宗三計　変更分在中　観物場摘要書及仕様書 ・四ツ橋小ヤ分　借家仕様書　※３冊を合冊
		図面	変更四ツ橋倶楽部初階平面圖　尺度百分ノ一
			仝　階上平面圖　尺度百分ノ一
			四ツ橋倶楽部　観物場平面　百分之一
			梁断面圖
			固家割伏圖　百分之一
パーテ館	観物場	仕様書・摘要書等	・明治四十五年弐月十五日　宗三計　観物場摘要書仕様書　Mパーテ舘　仮屋建　大工中村 ・パーテ舘　定設観物場新設御願・摘要書 ・パーテ舘　五二舘第二変更　定設観物場変更摘要書及ビ仕様書　※３冊を合冊
			・千日前分ニテ前御許可ニナリタル分　Mパーテ舘之分　定設観物場摘要書仕様書　大　中村氏 ・四十五年四月廿三日　第弐回　パテー舘変更ニ對スル摘要書及ビ増設付テノ仕様書　中村 ※２冊を合冊
			明治四十五年四月廿四日調　変更二付テノ摘要書及仕様書　Mパテー舘　定設観物場摘要書仕様書　中村氏
			・活動寫真場パーテ舘劇場仕様書　水渕様之日賀恵寫　大工中村　但シ他人ニ借用觀覧ハ無用 ・定設観物場表看板屋根上飾様変更摘要書及仕様書 ・観物場新築願 ・〔階下客席・敷地・建物坪数につき覚書〕 ・客席坪数 ・表景様鉄柵増設摘要書及仕様書 ・附属建物（水場）仕様書　※７冊を合冊
		図面	パーテ館
人気館	観物場	仕様書・摘要書	人氣館　観物場摘要書
			・人氣舘電氣舘常盤座假設觀物場摘要書仕様書　明治四十五年一月十六日大火度腮 ・千日前第壱電氣舘　大矢様ノ分　摘要書及仕様書　四十五年壱月弐十一日調　但壱月十六日大火ノ時　宗三計 ・千日前常盤座觀物場摘要書仕様書　明治四十五年一月廿二日腮　※３冊を合冊

千日前常盤倶楽部	観物場	仕様書・摘要書	山田様　宗三計　千日前常盤倶樂部　常設觀物場新築摘要書及仕様書　四十四年四月二十五日　大工中村
		明細書	活運寫真場　千日前常盤倶樂部　新築工事件　明細見積リ書　四十四年六月　大工中村
市岡遊覧所	施設	図面	市岡遊覧所
小桜館	施設	図面	小櫻館
中央活動写真館	施設	図面	中央活動写真館
黄花園	施設	図面	黄花園
大参　電気館	施設	図面	大参　電気館２
常盤湯	湯屋	図面	常盤湯
			常盤湯設計図
東湯	湯屋	仕様書・摘要書	参考トシタル分　湯屋改造摘要書仕様書（印）（通称東湯）
不明	湯屋	仕様書・摘要書	四十五年四月廿■日　山田様の分　湯屋改造摘要書仕様書　中村氏
宅舎	民家	図面	宅舎新築１
			宅舎新築２
長屋		仕様書・摘要書	・長屋新設摘要書仕様書 ・長屋新設摘要書仕様書 ・長屋新設摘要書仕様書　※３冊を合冊
その他	その他	覚書	梅田歌舞伎座について
			棟梁　中村儀右衛門　履暦
		履歴書	明治四拾壱年九月改メ設計者履暦書
			履歴書
			履暦書
			履暦書
			設計監督者履歴書
		日記	明治四十年　當用日記
			明治四十一年　當用日記
			明治三十七年　當用日記
			明治三十九年　當用日記
			大正弐年　當用日記
		覚書	〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
			〔覚書〕
		大道具帳	詳細は、表２を参照。
		出勤簿	明治四十三年壱月　第貳號　出勤簿　大中村
			大正九年七月　第壹號　人夫出勤帳　大中村
		劇場取締規則	明治參拾年十月弐拾五日　府令第百九十壱号　改正　劇場取締規則　中村
不明	不明	仕様書・摘要書等	・定設観物場非常口増設変更摘要書并ニ仕様書 ・劇場新築仕様書 ・仕様書 ・建物坪数合計　※４冊を合冊
			〔仕様書〕
		明細書	木材明細書
			・俳優室新築明細 ・俳優室新築明細書　※２冊を合冊
		見積書	大正参年壱月　千日土地建物株式會社　大道具常式明細見積書　大■　中村儀右エ門
			ナンバ石幸見積書
			材木明細見積書
		ドームのある図面	三階刻伏之圖　尺度百分ノ一
			三階平面之圖　尺度百分ノ一
			階上平面之圖　尺度百分ノ一
			初階平面圖　尺度百分ノ一
			側断面規計　尺度百分ノ一
			正面断規計　尺度百分ノ一
		肉筆図面	敷地坪数・建家坪数・客席坪数内訳
			階下平面圖　尺度百分ノ一　※千日前通道路に面する
			弐階平面圖　尺度百分ノ一
			参階平面圖　尺度百分ノ一
			〔階下平面図〕※千日前通道路に面する

不明	不明	図面	階上平面之圖　尺度百分ノ一
			階上平面圖　尺度百分之一
			初階平面之圖　尺度百分ノ一　※千代崎橋筋道路に面する
			階上平面圖　縮尺百分ノ一
			初階平面圖　縮尺百分ノ一　※千日前筋通りに面する
			断面（正面桟敷ノ部分）
			正面建繪圖　尺度五十分之一、平面圖　仝、階上平面圖　仝、階上刻伏　仝、小屋刻伏　仝（１）
			正面建繪圖　尺度五十分之一、平面圖　仝、階上平面圖　仝、階上刻伏　仝、小屋刻伏　仝（２）
			本館東側面規計 尺度五十分之一
			基礎ＳＬab詳細、断面部床版詳細ほか
			基礎梁、中央断面、中央部断面、断面、海老紅梁部、基礎及柱詳細ハ大柱(大基礎)ニ準ンス、向拝紅梁、両端断面、小梁詳細、棟梁詳細、棟梁配筋上圖ニ準ンス、側梁詳細
			階段親柱手摺子笠木側板　縮尺五分之壹、■（階）段　縮尺貳拾分之一、階段室及便所仕切矩計　縮尺五分ノ一　（１）
			階段親柱手摺子笠木側板　縮尺五分之壹、階■（段）（縮尺貳拾分之一）、階段室及便所仕切矩計　縮尺五分ノ一　（２）
			〔正面図〕
			〔平面図・基礎ほか〕
			小屋伏、二階伏、床伏
			〔断面図、平面図〕
			〔平面図〕
			〔階下平面図〕
			天井伏之圖
			奈落堀方伏圖　尺度百分之一
			〔側面図、平面図〕
			〔正面図、平面図〕
			〔断面図〕
			三階平面之圖　尺度百分ノ一
			〔平面図〕
			■(Y)oshimoto■nui Bunke ShinchikuSowuko　Danmen kanabakariZu 1/10
			〔側面図〕
			〔平面図〕
			〔池が描かれた図面〕
			〔階下舞台平面図〕
			（階上）■（平）面図　尺度百分ノ一（１）
			（階上平面図）尺度百分ノ一（２）
			正面建繪圖　尺度五十分之一、平面圖　仝、階上刻伏　仝、小屋刻伏　仝、階上平面之圖仝
			階上平面圖　縮尺百分ノ一
			附近見取圖　※難波新道四番町 道路に面する
			〔平面図〕
			三階床伏圖、縮尺五十分之壹、地下室地形　縮尺五十分之壹、壱階床伏図　縮尺五十分之■
			正面断面規計圖、梁行断面圖　縮尺五拾分之一、小屋伏圖　縮尺五拾分之一
			初階平面圖　縮尺百分ノ一
			〔平面図〕
			〔平面図〕
			〔階下平面図〕
			〔建物断面図〕
			〔塔のある図面〕
			〔千日前新築劇場周辺宅地図〕
			表櫓修繕建繪図　尺度五十分ノ一
			〔舞台平面図〕
			〔南座　平面図〕
			小屋伏　百分一
			二階伏　百分一
			〔側面図〕
			〔断面図〕
			正面断規計之圖　尺度百分ノ一
			〔舞台図面〕
			〔横面建絵図〕
			〔建具図面〕
			〔図面〕

凡例
①資料名が不明なものについては、〔　〕を付した。
②資料名の後に、※を記して注釈を付した箇所がある。
③同一の資料内容が２つ以上ある場合は、資料名の後に（１）（２）などの番号を付した。
④記載年月日が明らかな資料は、年代順に列記した。
⑤明らかな誤字は訂正しているが、そのままの表記として（　）を付して補訂した箇所もある。
⑥判読不明箇所については、■または［　］とし、推測できる場合には（　）を付して補訂した。

表２　中村儀右衛門資料のうち大道具帳一覧

劇場名	年月	表題
浪花座	明治20年９月	當ル明治廿年亥の九月吉日　盆替リ狂言　浪花座　前狂言 宇都宮株木建設　壽式三番叟　道具帳
	明治28年６月	當ル二の替狂言　明治廿八歳未六月三十日初日　前狂言 残魂魄牡丹燈籠　中狂言 實録伊達■　切狂言 色競六歌仙　建道具帳
	明治28年６月	當ル未六月狂言　前狂言 義経千本櫻　中狂言 鬼薊花街十六夜　切狂言 土佐繪所作事　大道具附帳　※裏表紙に「明治廿八年　浪花座」とある
	明治28年11月	當ル明治廿八年十一月興行 浪花座　前狂言 水戸黄門仁徳録 続六幕　中狂言 一の谷嫩軍記 壱幕　切狂言 新板歌祭文　壱幕　建道具帳
	明治29年７月	當ル明治廿九年七月新きやうげん　第壱番目 雪解の曙　中幕　大切 日清大角力　大道具帳　千穐萬歳　大入叶
	明治30年１月	當ル明治三十年第一月狂言　前狂言 新規作肥後木履　建道具
	明治30年４月	剛胆義婦　都新聞探検実話　㋕蒲鉾屋殺し　大道具附　明治三十年四月興行　浪花座
	明治30年10月	當ル明治三十年第十月替り 浪花座　前 春日局　中 檻樓錦　切 花街模様劇稲妻
	明治31年２月	明治三十一年二月上旬　前狂言 中山問答　中幕 本蔵下邸　切狂言 夕きり 伊左衛門
	明治31年３月	當ル明治三十一年第三月替り狂言　前狂言 板倉都日記　中狂言 美濃楠嫩葉軍記　切狂言 戀飛脚大和往来　建道具
	明治31年４月	當ル明治三十一年第四月狂言　前狂言 鏡山舊錦繪　中狂言 競伊勢物語　切狂言 曦小袖悟道野晒　建道具
	明治31年９月	當ル明治三十壱年九月　前 柳のおりう三拾三軒堂　中 伊達原　切 鈴ヶ森 権八　浪花座　大道具帳
	明治31年11月	當ル明治卅一年第十一月狂言　前 日本晴伊賀復讐 七幕　中 傾城青陽鶏 壹幕　建道具帳
	明治31年12月	當ル明治三十一年第十二月狂言 浪花座　前狂言 苅萱桑門築紫轍　中狂言 八重霞浪花濱荻　切狂言 松銀杏當世模様　大道具帳
	明治32年１月	當ル明治三十二年亥一月狂言 浪花座　前狂言 荒川三勇士　中狂言 野ざらし小兵衛　切 鬼一法眼三略巻　建道具帳
	明治32年３月	當ル明治卅二年三月狂言　前 勝笠懸女鑑　切 紙子仕立両面鑑　建道具帳
	明治32年４月	當ル明治卅二年四月狂言 浪花座　前狂言 淀屋辰五郎　切狂言 殷妲妃　〔　〕道具帳
	明治32年５月	當ル明治卅二年五月興行　前 雪月花　切 阿女郎忠次　建道具帳
	明治32年７月	當ル明治卅二年七月狂言　前 くぎぬき　切 豊臣秀吉故郷錦　建道具帳
	明治33年２月	明治三十三年子二月狂言　先代萩御殿場迫　三日月治郎吉　切 三代記　大道具帳
	明治33年３月	當ル明治三十三年　子の三月狂言　大道具帳　佐野善左衛門 実録　※裏表紙に「浪花座」とある
	明治33年７月	當ル明治三拾三年　大道具　子の七月狂言　當ル子歳七月狂言浪花座　一番目 辨天紫毒婦小説 四冊　中幕 高祖日蓮大士南條抄之内 法華経功力 三幕　大切　大道具帳
	明治33年９月	明治卅三年子九月吉日　大阪朝日新聞根あがり松 七十壱回　中 花上野誉廼石碑 志渡寺の場　大道具帳　※裏表紙に「浪花座」とある
	明治34年３月	當ル明治卅四年三月狂言　神田児　四幕　大阪浪花座興行　新演劇山口定雄一座
	明治34年７月	明治三十四年七月　大道具帳　浪花座
	明治34年６月	當ル明治三十四年六月かわり　松嶌屋末廣屋一座　前狂言 藤紫縅染分 五筋　中狂言 伊賀越 沼津之段　切狂言 洗張鱗形浴衣地 御誂三反　大道具帳
	明治34年９月	當ル明治卅四歳　丑九月吉日　一日初日　毎日新聞　前 越後騒動　中 戀女房染分手綱 重の井子わかれの段　切 吉原末廣話　石井恒右衛門　中村家末廣家■（京ヵ）家一座　建道具
	明治34年12月	當ル明治卅四年十二月狂言　大道具帳　俳優金剛 演劇忘年會　棟梁
	明治35年１月	當ル明治三拾五歳一月狂言　前狂言 松廻民士気任■ ブシノカタギ　中狂言 紀有常　切狂言 大文字屋　建道具帳
	明治35年２月	當ル明治三十五年二月浪花座　前 伽羅先代萩　中 嫁おとし谷　切 源平魁躑躅　建道具帳
	明治35年５月	當ル明治三十五年五月　浪花座
	明治35年６月	當ル明治卅五年六月狂言 浪花座　六月三日初日　前 敵討崇禅寺馬場　中 御行松　切　大道具
	明治35年10月	當ル明治三十五歳寅十月狂言　前 朝日新聞狂咲　切 籬菊狐懸罠　小狐長次　大道具帳　千穐萬歳　大入叶
	明治35年12月	當ル明治卅五年　十二月顔見世狂言　隅田春梅由　大和橋馬伐　曽我の對面　仙代萩御殿　大手笹連手打　建道具帳
	明治36年１月	當ル明治三十六年一月狂言　壹番目 孝曽我譽舗革 五幕　貳番目 鬼薊廓色縫　大切 戀飛脚大和往来 壹幕　浪花座　大道具帳
	明治36年２月	當ル明治三十六年二月二の替り狂言　前狂言 燈臺鬼　中狂言 壷坂　切狂言 繪本太功記　大切 狂乱　建道具帳　浪花座
	明治36年10月	當ル明治卅六年十月 浪花座　前狂言 岩見重太郎　中狂言 倭假名在原系圖　切狂言 鐘鳴今朝噂　道具帳
	明治36年11月	當ル明治三拾六年卯十一月狂言 浪花座　前狂言 復讐湖水曙　切狂言 露月の枝　建道具帳
	明治44年11月	當ル明治四拾四年第十一月狂言　山崎紫紅子作　一番目 真田幸村 三満来　大道具　※裏表紙に「浪花座」とある
	明治44年12月	當ル明治四拾四年第十二月興行　壱番目 琵琶歌 五幕　切 心中天網嶋 河正の場　道具帳　※裏表紙に「浪花座」とある
	明治45年２月	當ル明治四十五年二月きやうげん　浪花座　一番 黄金五枚　中幕上 操三番叟 正札　中幕下 平家蟹　二番目 お染久松妹背の門松　大切 鎌倉武士　大道具帳
	大正２年７月	大正二年七月興行　新かづら下　大道具帳　浪花座
	大正２年12月	當ル大正弐年十二月　御目見得闇争　菅原車洩（曳ヵ）　同寺子屋　忠臣蔵三段目　同茶屋場　妹背山御殿　河内山玄関　五人男濱松屋　　鞘當　千穐万歳　大入叶
	年未詳	〔　〕三十年 ■月狂言　東京青年歌舞伎一座　前■（狂）言　雲上野錦簇朝風　中狂言 大和橋三七信孝馬士切場　切狂言 怪談雨模様月笠森　大切二人道成寺　浪花座　建道具
	年未詳（子５月）	當子五月狂言　一番目 鬼奴　切狂言 大蔵卿　道具帳　浪花座
	年未詳（丑１月）	當ル丑歳初春狂言 浪花座　一番目 新古演劇十二種之内菅公 四幕　二番目 侠客春雨傘 六幕　大道具帳
	年未詳（丑５月）	當ル丑年五月狂言 浪花座　一番目 河内山　中幕 源平繪巻物　切狂言 妹背の門松　大道具帳
	年未詳（寅３月）	當ル寅の三月狂言 浪花座　前 天満宮　切　大道具帳
	年未詳（申９月）	當ル申の九月きやうげん　第弐番目 古代形新染浴衣　大道具の帳　浪花座
	年未詳（酉９月）	當ル酉の九月きやうげん　大道具附　浪花座
	年未詳（６月）	當六月興行　大道具附　浪花座
	年未詳（11月）	當ル霜月狂言　浪花座　第一番 小笠原実記 六幕　中幕 佐々木高綱 壱幕　大喜利 廓文章 壹満来　建道具帳
	年未詳	二番目 夕ぎり伊左衛門 三幕　大道具　※裏表紙に「浪花座」とある

弁天座	明治28年2月	當ル明治廿八年二月狂言 辨天座　前 人耶鬼耶涙香正説西洋譚　切 本朝廿四孝　建道具帳
	明治28年3月	當ル明治廿八年三月替 辨天座　作者　前狂言 八陣守護城 四幕　中狂言 名誉成復讐 弐幕　切きやうげん 男競三国湊 上下　建道具帳
	明治28年７月	當ル明治廿八年七月替り狂言　前狂言 夏祭浪花鑑　中狂言 大塔宮曦鎧　切きやうげん 東街道四ツ谷怪談　建道具帳
	明治29年４月	當ル明治廿九歳申四月 辨天座　假名手本忠臣蔵　建道具方
	明治29年６月	當ル明治廿九年申六月 辨天座　前狂言 黄鳥笛梅都軍談　中狂言　切狂言 嶋衝（衛ヵ）月白浪　建道具帳
	明治30年４月	當ル明治卅年四月替り　前狂言 假名手本忠臣蔵　中狂言 熊坂長範物見松 切きやうげん 平井権八吉原街　建道具帳
	明治30年10月	當ル明治三十年十月替り狂言　前狂言 北雪美談時代鑑　切きやうげん 薊小僧　建道具帳
	明治31年４月	當ル明治三拾一歳戌四月狂言　前狂言 假名手本忠臣蔵　建道具帳
	明治31年８月	當ル明治三十一年戊八月狂言　前狂言 朝日新聞燈蛾　切狂言 五大力戀緘　建道具帳
	明治32年	・明治三十二歳初春興行　一番目 大塩平八郎 五幕　中狂言 大切閣と光 三幕　大道具帳 ・當一月興行　櫓太鼓　三幕　　辨天座
	明治32年５月	當ル明治三十二年亥五月狂言　前狂言 梅魁天神利生記　中狂言 朝日新聞内地雑居　切狂言　建道具帳
	明治32年９月	當ル明治三十二年亥九月狂言　前狂言 本町（朝ヵ）絲屋娘　中狂言　切狂言 朝日新聞放囚人
	明治33年11月	當ル明治卅三年第十一月 弁天座　前 假名手本忠臣蔵 大序より七段目まで　切 朧月春夜話 三幕　大道具帳
	明治34年１月	當明治参拾四年一月狂言　壹番目 婦人の秘密　貳番目 おとこ心　大道具帳　於道頓堀弁天座　新演劇
	明治35年１月	當ル明治卅五年第一月狂言　前狂言 松竹梅譽の仇討 十壱幕　切狂言 芦屋道満大内鑑 上中下
	明治35年４月	當ル明治卅五歳　寅四月興行　二番目 朝日新聞こぼれ梅　建道具
	明治36年６月	當ル明治三十六年六月替り狂言　前 箱根權現蹟仇討　中 女俊寛　次　切 新皿邸　建道具帳
	明治36年８月	當ル明治三十六年八月興行　前 花井おむめ　切 新古演劇十二集の内 清玄 上下　建道具帳
	明治37年７月	當ル明治三十七年第七月きやうげん　前狂言 小野道風青柳硯　次狂言 二人兵士　切狂言 活動写真睦玉川　棟梁
	明治37年11月	當ル明治卅七年十一月狂言　前 勸善徴（懲ヵ）悪覿機関　中 信州川中嶋　後 平井權八吉原衢　切　建道具
	明治38年７月	明治参拾八年七月興行 辨天座　東京芝かん　前 坪内博士作まきの方　中 夜の■（序ヵ）野さき　後 熊谷陣屋　切 岩井風呂 團七茂兵衛　中村
	明治39年１月	・當ル明治三十九年一月吉日　前狂言 清正誠忠録　次 曽我譚對面　中 妹背山　後 櫻しぐれ　切 三幅對土佐繪拙 ・當ル十月狂言　一番目 大塩平八郎 五満久
	大正２年	當ル大正弐年初春狂言　前 假名手本忠臣蔵 大序より七ツ目迄　切狂言 所作事吉野山 壱幕　大道具附
	６月	當ル六月辨天座興行　親は法官子は罪人法廷乃血涙　大道具帳　佐藤新演劇
	７月	當ル七月狂言　前 庚申釵大和実記　中 西海譽浪宇和島　切 壇浦兜軍記　あこや　建道具帳　三十一年辨天座
	７月	當七月興行　東京名物會　道具帳　辨天座
	９月１日	九月一日初日出場　前狂言　序　二　三　四　中幕　上の巻下の巻　切狂言御殿より狐火まて　弁天座
	年未詳	表題なし　※裏表紙に「辨天座」とある
中座	明治44年６月	當ル明治四拾四年第六月興行　一番目 上の巻 暗争 下の巻 五條橋　中幕 布引瀧 九郎助住家 實盛物語りの場　二番目 おつま八郎兵衛　全四幕　中座　大道具
大阪歌舞伎	明治31年７月	明治三十一年七月吉日　行興　人命の詐欺　拾壱幕　歌舞伎　大道具帳
角座	明治37年９月	當ル明治三十七年九月狂言　建道具帳　源太物語　近海譚　八犬傳　長吉長五郎　重の井　三代記
	明治39年６月	當ル明治卅九年六月狂言　假名手本忠臣蔵　三段目より七段目迄　大道具附　　千穐万歳　大入叶
不明	明治11年12月	明治十一寅十二月吉日　乗掛合羽道中双六　けいせい阿波鳴戸　楠むかし噺　日高川入相花王 道行道成寺
	明治22年	明治二十二年　しげる造物附　五日月
	明治29年９月	當ル明治二十九年九月狂言　壹番目 文覺　建道具帳
	明治32年８月	當ル明治卅二年八月狂言　前 堪忍袋　切 所作事　道具帳
	明治33年１月	當ル明治三拾三年　子の壹月狂言　大道具帳
	明治33年４月	當ル明治三十三年　子の四月狂言　大道具　　當ル明治三拾三年四月狂言　一番目 東二條秀麿 八幕　二番目 お染久松　大道具帳
	明治33年10月	當ル明治三十三年　拾月狂言　谷間姫百合　大道具帳
	明治34年７月	當ル明治三十四年七月替り狂言　前狂言 浪花産百合咲分 六株　次狂言 繪本太功記 杉（鷺ヵ）の森　後狂言 夕涼浮佐野聞書 三■（幕ヵ）　切狂言　建道具帳
	明治34年11月	當ル明治三十四年丑十一月狂言　建道具帳
	明治34年	明治三十四年［　］月狂言［　］小猿［　］（箱根霊）験蹟仇■（討）
	明治35年３月	當ル明治卅五年三月興行　前狂言 昔鐙文武功
	明治35年５月	當ル明治三十五年五月替り狂言　敵討譽高松　建道具帳
	明治35年７月	當ル明治卅五年七月替り狂言　前狂言 なつまつり夏祭浪花鑑 五幕　切狂言 すゞきもんど僂重緑色幕　上中下　大道具帳
	明治37年10月	當ル明治三十七歳辰十月
	明治38年９月	當ル明治三十八年　第九月きやうげん　前狂言 ひらかな盛衰記　中狂言 不如歸　切狂言 植木屋　建道具
	明治39年８月	當ル明治卅九年八月興行　前　切　大道具帳　千穐万歳　大入叶
	明治40年９月	當ル明治四十年九月狂言　壹番目 石川五右衛門 五幕　喜利幕 羽衣 壱満来　大道具帳
	明治42年１月	明治四十二年一月大吉日　千穐万歳大々叶　當ル一月きやうげん　佐藤紅緑作　潮 七場　大道具帳
	大正４年12月	大正四年十二月貳の替り狂言　月魄　大道具帳
	年未詳(卯８月)	當ル卯の八月きやうげん　大道具附帳
	年未詳（３月）	當ル三月狂言　前狂言 菅原傳授手習鑑　四幕　當ル二番目きよげん 両国紀聞　大道具附
	年未詳（２月）	當ル貳月興行狂言しんこてん　大道具帳　金松四場
	年未詳（５月）	當ル五月きやうげん興行　前狂言 吃又平　中きやうげん 木村長門守　切狂言 戦国瑣事軍人の遺族　建道具帖
	年未詳（６月）	當ル六月興行　高野山道具帳　佐藤演劇
	年未詳（６月）	六月　大日本帝國大勝利　大道具
	年未詳（６月）	當ル六月替り狂言　第壹番目　大道具附帳　千穐萬歳　大入叶
	年未詳（８月）	當ル［　］八月　第一 百人坊主 五場　第二 卯の日諧 四場　中 太功記 壱幕　第三 土橋 四場　大切 戻り橋 三場　大道具附
	年未詳（10月）	當ル十月興行　一番目 新規作肥後木履 七幕　次 おじ■■三小塚原 壱幕　中 布引四 壱幕　切 柳 壱幕　大道具附

	年未詳	當ル初春二の替リ狂言　前 柳生流伊賀水月　中 堀川　切 八重桐　大道具■（附ヵ）
	年未詳	當ルかわり狂言　大道具附　千穐万歳　大入叶
	年未詳	當ル　前 曽我之仇討　中 合邦　切 山姥　大道具附
	年未詳	義と俠　大道具帳
	年未詳	當ル　玉菊　大道具附帳　千穐万歳　大入叶
	年未詳	三日月お六　大道具帳　森新演劇
	年未詳	序まく　天神かめの池　かへし
	年未詳	當ル狂言　松操美人生埋　大切 積恋雪関扉　大道具帳　大入叶　山口一座
	年未詳	當ルきやうげん　前 赤城義臣後日談　中 蓮生坊　切 戀飛脚大和往来　大道具
	年未詳	當ルきよげん　塩原多助傳 六まく　源平咲分躑躅 壱幕
	年未詳	大道具附
	年未詳	高野之義人 七幕
	年未詳	當ル絵本太功記　美人の公判　大道具帳
	年未詳	當ル戌ノ盆替リ　世情相宿噺　建道具帳
	年未詳	大道具帳　三日月治郎吉 五幕
	年未詳	當る狂言　春雨傘　六満来　大道具帳
	年未詳	表題なし
	年未詳	表題なし
	年未詳	表題なし

凡例

①表題がみられないものについては、「表題なし」と記した。

②年月日が明らかな資料は、年代順かつ月別に配列した。

③年月日と演目のみ記載されているものについては、『近代歌舞伎年表』（国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編、八木書店）と照合し、推測できる場合には劇場ごとに記した。

④明らかな誤字は訂正しているが、当て字のまま残した部分や、そのままの表記として（　）を付して補訂した箇所もある。

⑤判読不明箇所については、■または［　］とし、推測できる場合には（　）を付して補訂した。